

はじめに

一八〇四年二月一二日、午前十一時。ある巨大な哲学者がその七九年の生涯を閉じる。イマヌエル・カント——。末妹、そして、忠実なる友ヴァリアンスキー牧師に看取られての静かな最期であったという。

著作を通してその哲学思想は広く知れ渡り、カントの名声は鳴り響いていた。直接この大思想家と言葉を交わしたいと面会を求める者は後を絶たなかったが、その思いが叶えられた者はごく僅かであった。公職を退いてから八年あまり。来客をサロンに迎えて談論風発を愉しむ生活とは縁を切ったかのように、彼は書齋にこもり、仕事の総決算に没頭しようとしていた。

一七九八年一〇月一九日。弟子に宛てた書簡で彼は決意を述べている。

……手がけている仕事をなんとかやり遂げるだけの力が、自分のうちにわずかとはいえ残っているとも感じており、この余力によつて批判の仕事を終わらせ、まだ残っている空隙 (Lücke)

を満たそうと考えているのです。つまり、体系上欠かすことのできない自然哲学の固有な一部門たる『自然科学の形而上学的原理から物理学への移行』を仕上げることです。²⁾

だが、批判哲学の体系完成を阻む「空隙」を埋める作業は、完成をみることはなかった。身体は急速に衰えをみせ、亡くなる二年ほど前からは自分の名前を書くことも容易ではなくなっていた。彼の死後、書斎には夥しい数の手稿が残されていたという。

執筆活動ができなくなつてからの日々については、彼を看取つたヴァジアンスキーが報告している。見舞い客の顔を見分けられなくなつた後も、カントは気持ちだけは張り詰めていたらしい。体調が持ち直したときなど、周りを気遣い、ひたすら感謝の言葉を繰り返していたという。

死の七日前まで、彼は遠のく意識とたたかいながら、往診の医師を立てて出迎え、椅子まで勧めようとしたらしい。だが、途切れる意識の合間に往診の労をねぎらう彼の言葉は、訪問した医師には、単に意識混濁をきたした人間のそれとしか受け取られなかったようである。最期までしつかりとした状態を保ちたいという老カントのこの必死の思いは、毎日接していたヴァジアンスキーにしか分からなかった。

彼岸への旅立ちのとき、旅人はその直前までのしばらくのあいだ、己の生きた時間を記憶のなかで呼び覚ます。それはずっと昔に訪れた街の記憶であつたり、共に過ごした人々の記憶であつたり

する。体験したその瞬間に立ち戻り、その時を生き直しているかのように、旅人は語りだす。死の前にした下顎呼吸が刻む苦しい息遣いの合間に口にされるうわ言。その声は、今の今まで苦しうに息をしていた人間から発せられたことを疑ってしまうほど力に満ちている。

過去をいま一度生きる時間は、これから旅立つ彼岸からの迎え人との出会いの時でもある。既にこの世を去ったはずの親や知人、友人たちがやってくる。此岸での時を生き直しながら、彼岸からの訪問者を迎える旅人――。死に出の旅人にとって、医療の専門家からは死に至る直前の意識混濁と呼ばれるこの時間こそ、此岸の時間と彼岸の時間の交差のなかで旅の支度を整える「間の時^{あひだ}」である。

亡くなる一〇時間ほど前の午前一時ごろ、わずかに意識を取り戻したカントは、砂糖水を混ぜたワインを数滴口に含むと、「Es ist gut」と言ったという。それはワインが「美味い」という意味だったのか、「有難い」という意味だったのか、それとも自らの人生を事足りりとする「それでよい」の意だったのかは分からない。いずれにしても、これが大思想家カントの最期の言葉であった。

カントの死去が告示されると、偉大な思想家と最期の別れをしようと多くの人々が弔問に訪れた。公職を離れてからのカントの消息を知る者はごく一部であつたため、一般市民のあいだでは彼は既に歴史的存在になつていた。彼の死を耳にし、未だ存命であつたことに驚いた市民も少なくなかつた。彼の亡骸は一六日間にわたって十分に乾燥させるよう葬儀屋の手で処理が施され、またデスマスク制作のための型どりも行われて、自宅に安置された。弔問客は葬儀の日まで途切れることがな

く、なかには二度、三度と訪れた一般市民もいたという。自分の葬儀はできるだけ簡素に言い残していたカントの思いとは裏腹に、その葬儀は知人や弟子、大学関係者をはじめ、ケーニヒスベルクの市民が多数参列する盛大なものとなった。

二月二八日午後三時、市内にある聖堂や教会すべての鐘が鳴り響くなか、カントの棺は学生たちの手で自宅を後にする。市警察の指示で、葬列が通る予定の道はすべて予め除雪された。通りの両側は、予定時刻の三時間も前から市民たちで溢れていた。そのなかを、葬送曲を演奏する軍楽隊を先頭に、市の要人や大学関係者らが棺を誘導し、棺の後ろには、親戚や友人、弟子、そして一般市民の列が大聖堂まで続いたという。

葬儀の冒頭と最後には、カントのための葬送曲が演奏された。それは皇帝フリードリヒ・ヴィルヘルム二世のために用意されていた曲に、急遽、手を入れて仕上げられたものだった。市内の劇場につとめる専属俳優たちもその日の興行を中止してかけつけ、偉大な哲学者を失った街全体の悲しみを演出するため、聖書の朗読などに一役買ったという。そして多くの人々が見守るなか、カントの亡骸は大学の地下墓所に埋葬されたのである。

*

壮大な批判哲学の体系を構築しながら、そこに人間の生成変容が棲まう場所はないと明言したカント——。人間の変容は一種の革命であり、他律的人間が自律へと向かうその歩みはいわば跳躍の

ようなものとカントはいふ。論理づけが不可能であり、革命や跳躍としてしか語りえないものとしての人間の生成変容。啓蒙と成熟を教えることの困難を喝破したカントのこのテーゼは、教育に関わる者はもちろん、教育学を構築しようとする者にとって、教育という営み、教育学そのものの存立危機に関わる難題である。

論理体系に収めることが不可能な人間の生成変容は、あの不可触の「もの自体」へと押しやられてしまうのだろうか？　しかし教育の理論と実践は、それ自身が人間の生成変容プロセスの一部であるかのような論理の伴走をこそ欣求するのではないだろうか。ちょうど眼球が光のなかで、光によつて、光へと形成されるように、人が生成変化のなかで、生成変化によつて、生成変化へと形成されるような、そんな教育学を構想すること。それは透明人間を追いかけ、布をかぶせて姿をたち現れさせようとするかのような無謀な試みに見えるだろうか。自らの誕生についても終焉についても、傍らの他者の語りを通してしか物語を紡ぐことのできない人間たち。しかしこの世に生まれ落ちた人間は、言葉の海にその身を沈めながら、いつのまにか、ふと言葉を口にし始める。この「幼生の主体」が発達をとげてゆく、その秘密を擁護することこそ教育学の課題でなくてなんだろうか。変容し、絶えず移りゆく人間の傍らに臨みつつ、その成りゆきと共にある教育学――。

一七八三年、カントはその『純粹理性批判』が呈示した命題を共に吟味してほしいという願いを込めて、メンデルスゾーン宛に書簡を送っている。

そこから確実な導きの糸によつて迷宮内を散策するという、批判がもともともっている楽しさが始まるのです。その迷宮のなかで人はあらゆる瞬間に行き惑うのですが、その度に出口を見出すのです。⁽³⁾

「もの自体」を眼差し、自らを生成変容の分身へと形成しようと試みる者達は、カントがものの自体の空隙を自ら穿ちながら、しかし同時に、その空隙のリズムが、それを通じてわれわれの心身へと到達するようなある導きの糸を、密かに、慎重に残しておいたことに着目する。導きとなる美学の糸——「タクト」。しかしカント以後、ドイツ観念論は、カントが美学の領域に託した発達の迷宮への糸口をむしろ丁重に埋葬し、その地面の上に弁証法の伽藍を打ち立てるだろう。そして教育学はといえば、意識的に、あるいは無意識的に、自然と自由をつなぐこの美学の糸を頼りに自らを鍛え直そうとしながら、つまるところ発達の荒い近似のようなカリキュラムの学へと、そしてまた効果的な手続き論としてのメソッドの学へと自らを駆り立ててきたのではなかったか。

カントの死から二〇〇年あまり。カント哲学の研究は今日ますます盛んである。その思想的遺産を発掘し、今という時代の下へ呼び起こそうと、熱心な努力は続く。しかし思想家のテクストと格闘することは、テクストという現^{うつ}場で、亡き思想家の今は亡き声を聴こうとする喪の作業に他ならない。それは歴史の精査である以上に、むしろ遠い記憶に耳を澄ますような作業であるだろ

う。死者を忘れるために、死者を思う。「服喪」とは、そのぎこちない繰り返しである。十全に聞き届けられることのなかった「多様なカント」を、今ここで反復すること。そのあてどない反復のなかにある私は、埋葬されたものの声なき声を求めて、葬送の列のなかに未だ立ち尽くしている。

*

発達の迷宮への彷徨を辿り直そうとする本書は、カントが呈示した問題系が教育的思考様式や教育学という学問形式にどのように受け継がれ、あるいは忘却されたかを軸に展開されることになるだろう。それはしかし、カントに還ることでは毛頭ない。カントと共にカントに抗することであり、より遠くまで跳躍するために、十分な助走距離をとるのである。迷宮を見据えたまま、後ろ向きに教育学の歴史をさかのぼっていく我々の上に、教育をめぐるどんな「空」が広がっているだろうか……。教育の理念、思考、技法、それらすべてを記憶しているだろう教育の天球の黄昏時には、ひとつそりと目立たない星座が見えてくるかもしれない。

教育学の多様性を多様性のままに、もう一度想起してみようと思う。鳥の羽根で出来たはさみを手に、大空からその「青み」だけを切り取るうとするかのような、そんな想像力を携えて――。